

不登校を予防する指導・援助の在り方に関する調査報告

— 教師と児童の意識調査から —

渡部 学 (福島大学大学院教育学研究科)
青木 真理 (教育実践総合センター・教育臨床学)

文部省は「登校拒否はどの子にも起こり得るものである」との見解を示し、学校での取り組みの重視を提言している。そこで、学校における不登校予防の方法に関して教師と児童がどのような意識を持っているかについてアンケート調査を行い、その結果をもとに報告する。また、不登校予防におけるチーム指導についても言及する。

[キーワード] 不登校予防 アンケート調査 意識のズレ チーム指導

I はじめに

現在の教育問題の中で、不登校は特に深刻な問題である。文部省の学校基本調査によると「学校嫌い」を理由に1998年度中に30日以上欠席した小中学生は12万人を越えている。この数は、年間30日以上欠席者を調査し始めた1991年から年々増加しており、過去最高の欠席人数となっている。

文部省(1992)は、「登校拒否問題への対応の基本的視点」において「登校拒否はどの子にも起こり得るものである」という見解を示し、学校での取り組みの重視を提言している。学校における取り組みの中で一番有効な援助・指導は予防としての対応と早期発見・早期対応であると思われる。

そこで、「不登校はどの子にも起こり得る」という観点から、不登校予防のために教師はどのような対応を必要と感じ、児童は教師にどのような対応を求めているのかを明らかにするために意識調査を行った。その結果を中心に報告する。

II 方法と対象

福島県内の公立小学校5校の5年生335名(男子166名、女子169名)及び現在4・5・6学年を担当している教師49名(男子25名、女子24名)、合計384名に対し、無記名アンケート(資料)を配布して回答を求めた。質問の内容は、岡山県教育センター(1993)の「登校拒否に関する研究」、根本(1996)の「教育的雰囲気醸成する教師の行為についての研究」の質問紙を参考に、現職教員などのインタビューから得られた項目などを加え「不登校を予防する手だて」に関する54項目(日常の対応27項目、元気のないときや落ち込んでいるときの対応27項目)を設定した。それぞれの項目に対して、教師には「やったほうがいい」「どちらかといえばやったほうがいい」「どちらともいえない」

「どちらかといえばやらないほうがいい」「やらないほうがいい」の5段階の評定尺度で、児童には「してほしい」「どちらかといえばしてほしい」「どちらともいえない」「どちらかといえばしてほしくない」「してほしくない」の5段階の評定尺度で回答を求めた。また、登校回避感情の有無によって違いがあるかどうかを見るために、今年になって何らかの理由で落ち込んで学校に行きたくないと思ったことのあるなしをたずねる設問を加えた(有82名、無253名)。調査の結果は「やったほうがいい」「してほしい」の5点から「やらないほうがいい」「してほしくない」の1点までの1点きざみの得点を与え、得点が高ければ高いほど望ましいと考えている対応とし、得点が低いほど望ましくないと考えている対応として示した。

III 結果

1. 望ましいと考える援助

(1) 児童が教師に望む援助(平均値4.2以上)

① 日常の対応

みんなに楽しい行事を企画する機会を作る。
悪いことをした場合、すぐに叱らず理由を聞く。
発表で間違えたとき、うまくまとめる。
失敗したことを笑ったりした友達を注意する。
冗談を言って笑わせてくれる。
発表を一生懸命聞いてくれる。
いじめられたとき、話をしっかり聞き注意する。

② 元気がないとき、落ち込んでいるときの対応

仲のいい友達が遊びに誘ってくれる。
宿題など、あまりつらくならないように気を使う。
好きな友達と席を近くにしてくれる。
一人でいて元気がないとき友達が話しかけてくる。
席を交換してくれる。

(2) 教師が望ましいと考える対応(平均値4.2以上)

① 日常の対応

子どもが話しかけてきたときじっくり話を聞く。
 子どもの発表を一生懸命聞く。
 良いところや頑張っているところをほめる。
 やさしく、笑顔で接する。
 体調が悪いとき、やさしく声をかける。
 失敗したことを笑ったりした人を注意する。
 いじめがあったとき、話をしっかり聞き注意する。
 遊びや活動など一緒に取り組む。
 子どもに楽しい行事を企画する機会を与える。
 悪いことをした場合、すぐに叱らず理由を聞く。
 教師の方から時間を作って話し合う機会を設ける。
 授業中操作的活動や動きのある活動を取り入れる。
 発表で間違っただどもの意見をうまくまとめる。
 授業中個別指導の機会を多くする。
 励ましの意味で頭をなでる、肩をたたく。

② 元気がないとき、落ち込んでいるときの対応
 子どもの趣味や好きなことについて話をする。
 保健室など教室以外への登校を認める。
 元気がない児童の保護者に連絡して話を聞く。
 授業中励ましの言葉かけをする。
 休んだ次の日、温かい言葉かけをする。

2. 因子分析結果から見た不登校を防ぐ指導・援助のあり方

児童が求める対応と、教師が不登校予防に必要と考える対応にどのような違いがあるかを因子分析結果から見てみたい。

(1) 因子分析及び因子尺度の決定

児童・教師それぞれに提示した54項目の因子構造を明らかにするために、全項目で主因子解の因子分析を実施した。固有値の変化に着目し、次の因子との固有値の差が相対的に大きいところまでの因子を見ると、児童も教師も共に5因子が抽出されたので、5因子でバリマックス回転を実施した。

1) 児童から見た教師の対応

教師に求める対応に対して最も説明力の高い第1因子は励ましややさしい声かけなどが中心となっている。この結果から児童が教師に望むものは、励ましややさしい声かけというような、**あたたかさ、やさしさを持った対応**であるということが出来る。この因子の中に励ましややさしい声かけと一緒に教師に勉強を教わったり、教師と一緒に活動するという項目が入っている。勉強を教わったり、一緒に活動することは励ましややさしい声かけと同じようにとられているということである。

第2因子は、児童が休んだときの保護者への連絡や本人への関わりというような、**問題が起きそうなどきの予防的対応**ということが出来る。第2因子の尺度得点の全体平均が他の因子に比べて極端に低いことから、児童が望まない指導・援助ということになる。この因子には家庭訪問をして本人と話をしたり、保護者

と話をするという対応が入っている。これらの対応について児童は、教師に家にまで入って来られるということで侵入的に感じる可能性もある。第2因子の中のそれぞれの因子について他の因子との関係を見てみると「学校に来ていないとき、電話で励ます」や「元気がないとき、先生の席の近くにすする」、「学校に行けないとき、遅れてもいいから学校に来るようにいう」などの項目は第1因子に寄与している。つまり、これらの対応はあたたかさや、やさしさが感じられる対応ということが出来る。しかし、家庭訪問して本人と話をしたり、保護者と話をしたりするという対応については第1因子にほとんど寄与しないという結果になっている。児童にとって家庭訪問されて自分や保護者と話をすることに対しては、あたたかさややさしさを持った対応とはとれないということを示している。

第3因子は、失敗したりしたことを笑ったり、馬鹿にしたりした友達がいた場合の注意や悪いことをした場合には理由を聞くなどの対応が中心の、**本人の意見を尊重し、本人を守る対応**ということになる。これは、性差、登校回避感情の有無によって差が見られた対応である。男子より女子の方が、また登校回避感情のない児童よりもある児童の方がこれらの対応を望んでおり、自分を大切にしてほしい、自分を守るために悪いことをした人には厳しい対応をしてほしいと考えているようである。したがって、教師は事実をしっかりとつかむ必要があり、そのための話し合い、話を聞く耳を持つということが求められる。

第4因子は、元気がない児童に対して、仲のいい友達と班を同じくしたり、宿題を出すときにつらくならないように気をつかうなどの、**友達や能力等に配慮した対応**ということが出来る。これも、第3因子と同じく望まれている対応であり、性差および登校回避感情の有無による差はみられなかった。つまり、この対応に関しては男女とも、また、登校回避感情のある児童にも登校回避感情のない児童にも積極的に取り組むべき対応ということが出来る。

第5因子は、休んだときの友達からの電話や、迎えなどが中心となる、**休んだときの友達を通しての対応**ということになる。この項目に関しては性差があり、女子の方が多く望んでいる。女子は困ったとき友達を頼りにするということが出ているので、不登校の予防には友達の協力も必要となってくることを示唆しているということが出来る。

2) 不登校を防ぐための指導・援助

不登校を防ぐために教師が必要と考える対応に対して最も説明力の高い第1因子は、学校に来ていないときの迎えや、電話で励ますなどの**教師主導の指導的対応**ということが出来る。

第2因子は、先生の方からあいさつをするや優しく笑顔で接する、グループに入って一緒に給食をとるな

どの、友好的な雰囲気作りを心がけた対応とすることができる。

第3因子は、元気のない児童に対しての席の配慮や、いじめがあった場合子どもの話をしっかり聞いて対応にあたるなどの、**子どもの意見を尊重した対応**とすることができる。

第4因子は、始業時刻に遅れてきた子どもへの、言葉かけや元気のない児童への話しかけなどの、**コミュニケーションを重視する対応**とすることができる。

第5因子は、授業中の個別指導や学習の遅れがちな児童に休み時間勉強を教えるなどの、**学力補充を目指した対応**とすることができる。

3) 児童と教師の因子の比較

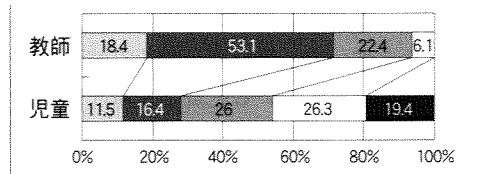
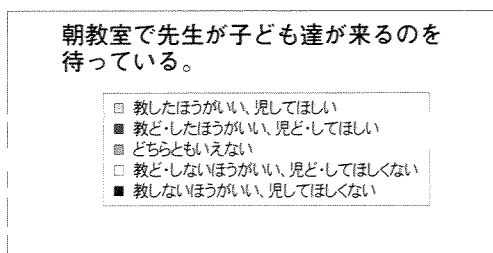
教師は、①指導的対応、②友好的な雰囲気作りを心がけた対応、③子どもの意見を尊重した対応、④コミュニケーションを重視する対応、⑤学力補充を目指した対応、を不登校を予防する指導・援助として認知している。児童は、①あたたかさ、やさしさを持った対応、②教師主導の対応（侵入的な対応、問題が起きそうなどきの予防的な手だて）、③子どもの意見を尊重し、本人を守る対応、④元気がないとき友達関係、能力等に配慮した対応⑤落ち込んでいるとき、休んだときの友達を通しての対応、を学校を楽しくするために望む（あるいは望まない）教師の指導・援助として認知している。

教師は、子どもに学力をつけたり、自分と子どもとの関係をよくすることによって不登校を予防しようと考えているのに対して、児童は元気のないとき、教師との関係よりも、友達からの働きかけを求めているようである。この結果から、教師は自分で何とかしようとするが、児童は友達を通しての援助を求めている傾向にあるといえる。

3. 教師と児童の意識がずれている対応

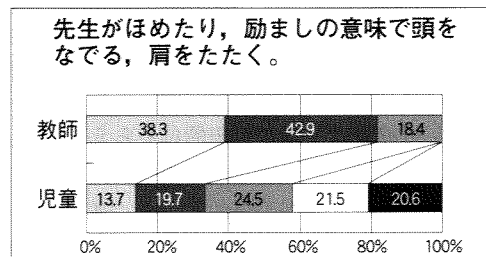
不登校予防を考える際に大事になってくるのが、本人の気持ちにそった指導である。したがって、教師も児童も肯定的にとらえている対応については積極的に行う必要があるが、教師が肯定的にとらえる割合が高く、児童が否定的にとらえる割合が高い対応（以下ずれが見られると表記）については指導に当たる際十分な配慮が必要となる。そのような対応については、教師と児童が必要としている割合の分布を含めて考えてみる。

- ① 朝教室で子どもが来るのを待っている。



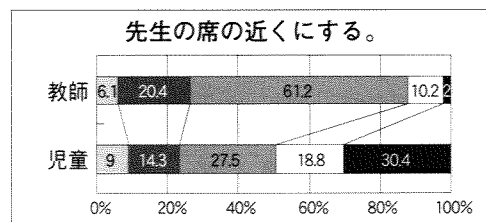
この対応は、教師の7割が肯定的にとらえているが、児童は肯定的にとらえているのが3割近く、否定的にとらえるのが5割近い。

- ② ほめたり、励ましの意味で頭をなでる、肩をたたく。



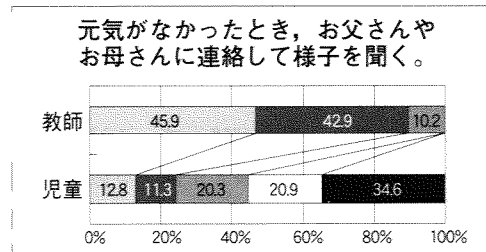
この対応については、教師は肯定的（8割）にとらえているが、児童は否定的にとらえている割合が多い（4割以上）。

- ③ 元気がないとき、教師の席の近くにする。



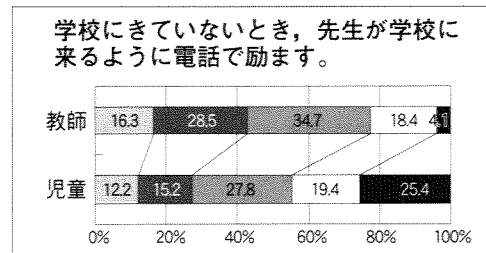
この対応については、肯定的にとらえる教師の方が否定的にとらえる教師よりわずかに多い。また、教師の6割はどちらともいえないと考えている。児童は否定的にとらえる児童が5割近くいる。

- ④ 元気がないとき、保護者に連絡して様子を聞く。



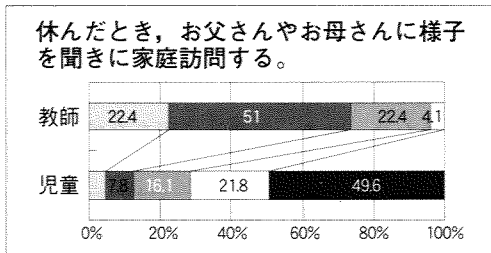
この対応は、教師のほとんどが肯定的にとらえ、児童は5割以上が否定的にとらえている。

- ⑤ 学校に来ていないときの電話での励まし。



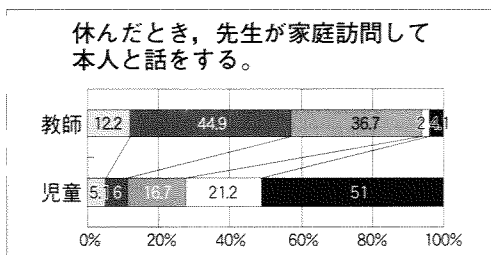
この対応は、教師の4割が肯定的にとらえ、2割が否定的にとらえている。児童の5割近くが否定的にとらえ、肯定的にとらえている児童は3割以下である。

⑥ 休んだとき、保護者に様子を聞くための家庭訪問



この対応は、教師の7割が肯定的にとらえている。それに対して児童は7割が否定的にとらえている。特に「してほしくない」の回答が5割近い。教師は7割が肯定的、児童は7割が否定的と、全く逆の反応を示していることがわかる。この対応は、教師と児童の考え方のずれが大きい項目である。

⑦ 休んだとき、本人と話すための家庭訪問



この対応は、教師の6割近くが肯定的にとらえ、児童の7割は否定的にとらえている。肯定的にとらえる児童はごくわずか(1割)であることがわかる。つまり、教師は家庭訪問して本人と話す事を肯定的に観じているのに対して、児童は否定的にとらえあまり望んでいない。この対応も教師と児童の考え方のずれが大きい項目である。

III 考 察

(1) 積極的に行うべき対応

教師が必要と考え、児童が望んでいる対応は、

- ①先生がみんなに楽しい行事を企画する機会を作る。
- ②悪いことをした場合、すぐに叱らず理由を聞く。
- ③発表で間違っただ子どもの意見をうまくまとめる。
- ④失敗したことを笑ったりした人を注意する。
- ⑤子どもの発表を一生懸命聞く。
- ⑥いじめがあったとき、話をしっかり聞き注意する。などである。これらは、子供の意見を尊重し、本人を守る対応ということが出来る。子どもの意見を尊重することや、子どもを守る対応は、児童も望み教師も必要と考えている対応である。そして、これこそが児童の人権を守る教師の態度ということが出来るだろう。これは不登校予防という観点だけでなく、学校教育における教師の望ましい態度というようにも考えられ

る。したがって、これらの対応は積極的に行う必要がある。

(2) 教師と児童の意識がずれている対応

1) 日常の対応

① 朝教室で子ども達がくるのを待つ

朝教室で先生が子ども達が来るのを待つという対応は今回の調査で7割を越える教師が肯定的にとらえているが、否定的にとらえている児童が4割以上もいるので、朝教室で教師が子ども達がくるのを待つことの良い点と悪い点について考えてみる。良い点としてあげられることは、教師が朝から教室にいることにより、教師の目の届かないところでいじめや問題行動などが起こらないようにできる。また、朝の子ども達の様子を観察したり、子どもとふれあったりする事ができるなどである。それに対して悪い点としてあげられることは、教師が朝から教室にいることによって児童は、教師に観察されているようで窮屈に感じる場合もあるということである。これと同じようなことを森田(1991)はマートンの「可視性」の概念を用い、「学校内の問題行動への『可視性』が拡大されることは、一面では生徒の抱えている問題の解決にそれだけ寄与するにも関わらず、他面では、『可視性』が拡大され、問題行動がより細部にわたって把握されることが必ずしも子ども達に好ましい結果をもたらさないことも起こる」と述べている。つまり、森田は教師の問題行動への可視性の必要性を述べた上で、子ども達が自由に振る舞える空間の必要性も述べているのである。確かに教師が問題行動を見つけて指導するという態度ばかりがでてしまうと、子ども達は息が詰まってしまう学校に行くということに抵抗を示す児童も見られてくるだろう。したがって、朝先生が教室で子どもがくるのを待つ場合には、問題行動を見つけて注意するという態度ではなく、子どもとふれあうということを前面に押し出し、子どもとともに活動するという配慮が必要であるだろう。

② ほめたり、励ましの意味での頭をなでたり、肩をたたいたりする

教師は励ましの意味で子どもの頭をなでたり、肩をたたくなどをする事は子どもとの親密度を高めたりするのに効果的だと考えている。しかし、児童の方はそう多くは求めていないという結果になっている。今回の調査では、学年比較を行っていないため、確実なことはいえないが、発達段階が進むにつれて恥ずかしさが出てきて、今回の調査対象とした5年生では身体接触をそれほど求めないのかもしれない。今回の調査結果からいえることは、児童は励ましの意味で頭をなでられたり、肩をたたかれたりする事は教師が思うほどにはしてほしいと思っていないということである。頭をなでたり、肩をたたくという行為を除いた、励ましやほめるという対応についてI-22で聞いているの

で、それについても考えてみたい。I-22「良いところや頑張っているところを見つけて励ましたり、ほめたりする」という対応は、児童平均が4点を超過しており、児童が望んでいる対応ということができる。このことから、児童のがんばりをほめるという行為は積極的に行ったほうが良いと思われるが、頭をなでることや、肩をたたくことに関しては、学年に応じて行ってよいのかと自問する必要があるだろう。

2) 元気がないとき、休んだときの対応

① 元気がないとき教師の席の近くにする

教師と席を近くにするということは、先に述べた可視性と関係があるだろう。教師は自分の近くに児童をおけば、よく目が届くし、何かあったとき対処できると考える。しかし、児童にとってはいつも見られているような気がしてのびのびと振る舞えなくなる可能性がある。元気がない児童がいた場合、その児童に対して目配りきちんとしてさえおけば、あえて教師と席を近くする必要もないと思われる。

② 元気がないときや休んだときの保護者への連絡

学校に行っていて元気がないとき、休んでいるときに、教師が保護者に連絡することについて、多くの教師が必要と考えている。学校に来ていても元気がなかったりした児童や欠席した児童に対して教師が保護者へ連絡する目的は、星野ら(1986)が述べるように元気がない理由や欠席の理由を聞いたり、子どもの家での状況を聞いたり、学校であったことを保護者に話して協力を呼びかけたりするというに、情報交換をしあって問題を早く解決することである。しかし、児童にとっては元気がなかったり、休んだりしたときでも親に連絡してほしいと考えている。これは、学校での問題については家にまで持ち込んでほしいという気持ちの表れであるように思われる。これだけ児童が否定的な感情を持っているということを考えると、教師が効果があると思っで行う場合でも十分な配慮《例えば、児童に直接がお父さんやお母さんにこういうことについて話をしたい(注意などではなく、協力を呼びかけるという内容)》というようなことを事前にいっておくなど》が必要となってくるだろう。

③ 休んだときの本人への電話での励まし

本人が休んだときに電話で励ますことについては、教師が肯定的にとらえ、児童は否定的にとらえてずれが出てくる。教師にとっては様子を聞いたり、励ましのつもりで電話するにしても、児童にとっては教師から注意されているように感じる可能性もある。特に、自分が学校に行きたいのに行けない場合などは、教師の電話がかえって児童の気持ちを焦らせてしまうこともある。しかし、学校との関係が繋がっているよう意識させる必要はある。したがって、休んだ児童に電話をする場合には、児童を注意したりするのではな

く、受容的な態度で気持ちを理解しようと努めることが求められる。

④ 休んだとき、家庭訪問をして本人と話を

家庭訪問をして本人と話をすることに対して教師は肯定的にとらえ、児童は否定的にとらえてずれが出てくる。これは③の電話での励ましと本人との直接の話という点では共通である。しかし、児童は家庭訪問での話という方に非常に拒否反応を示しているのである。児童にとって家庭訪問は自分の領域にまで踏み込まれるというような侵入的な感じを受けるのかもしれない。

教師は家庭訪問して本人と話をすることで、学校との関係がとぎれないように、また本人の気持ちを理解しようとする。しかし、子どもはそれを拒否している。したがって、教師が家庭訪問しようとする際は、子どもの都合を聞き、訪問の際には、教師の考えを一方的に押しつけたり、注意したりするのではなく、子どもの気持ちをじっくりと理解しようとする態度で望む必要がある。また、話の内容は学校のことだけではなく、子どもの関心事に共感するなどの配慮も必要となってくるだろう。

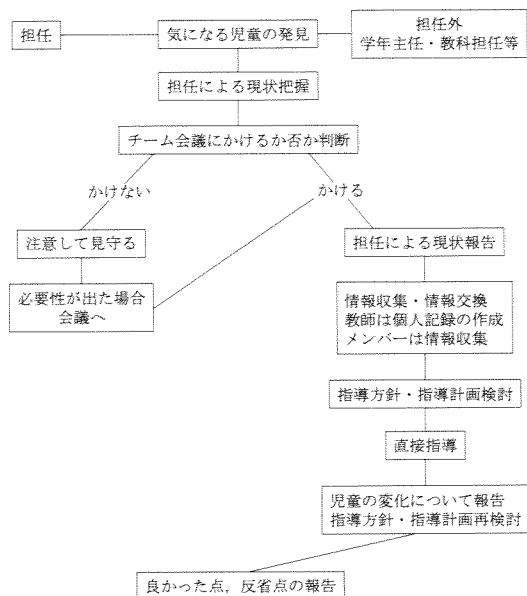
IV 不登校予防におけるチーム指導

岩本(1993)は、登校拒否がなぜこんなに増えたかということについて、実感的な仮説であると前置きしながらいくつかの問題提起をしている。その一つとして、教師が登校拒否についてほとんど勉強していないし、関わりの経験も少ないことから、登校拒否が治るまでとことん関わられる教師が極端に少ないこと。また、教師が登校拒否について学んでいく体制が学校の中でも行政のレベルでも作られていないことを指摘している。つまり、教師の理解不足が不登校児童を増加させている可能性があるということを示している提言である。

不登校になる要因は様々な問題が絡み合っていることができる。それだけに、教師が児童の一人一人の問題について理解できているかという面から考えると、岩本(1993)が指摘するような教師の理解不足というものを否定できないだろう。では、その理解不足をカバーして効果的な指導・援助にあたる方法はないだろうか。筆者は、一人の教師だけが思い悩んで試行錯誤的に指導にあたるのではなく、チームを組んで指導方針や指導計画を検討しながら対応にあたるのがより効果的であると考え。先に述べたことを中心に指導方針を決定して対応にあたるのが望ましいと考え、それでも効果が見られない場合、チームでの指導を考える必要があると思われる。そこでチーム指導での先行研究を見てみると梅垣(1988)は、不登校児の指導に際して、学校におけるチーム指導の利点を5つあげ、その必要性を示している。その利点は次の通りである。

- ① 多面的な理解と柔軟性に富んだ指導が出来る。
- ② 不登校児の信頼を得やすい教師を、中心に持っていくことが出来る。
- ③ 指導目標が複数の教師によるチーム会議で検討することが出来る。
- ④ 不登校児に専門機関を紹介する必要があるか無いかの判断も、チームで検討できる。
- ⑤ 不登校の理解と指導法が全校的レベルで研究・検討されて、生徒指導に関する教師の自己研修の場になる。

これらは、不登校児の指導に際して述べられているため、不登校予防という点から考えるとずれているものもある。しかし、「多面的な理解をはかる」や「指導目標をチームで検討する」、「不登校の理解と指導法が全校レベルで検討される」など、不登校予防という点から考えても有効に働く点が多いと思われる。そこで、不登校を予防するためのチーム指導・援助の流れを考えたい（下図参照）。



不登校を予防するためのチーム指導・援助の流れ

不登校を予防するにあたっては、早期発見が望まれる。その意味で、担任だけの目で見るとはならず、学年主任、教科担任等の目からも見るというように多方面からのアプローチが必要となってくる。担任が気になる児童を発見した場合には、自分なりに現状を把握し、会議にかけるか否かを判断する。また、担任外の教師から気になる児童の報告を受けた場合には、担任が状況を理解するようにつとめると同時に、発見した教師にも状況を見守るよう協力を呼びかける。発見した教師の状況判断と担任の状況判断を総合して、会議にかけるかどうかを判断するようにする。会議にかける必要がないと思われた児童に対しても、担任は十分に目を配っておき、必要に応じて会議にかけるなどの配慮が求められる。

担任が会議にかける必要があると思われる児童につ

いて、会議に参加する教師が理解できるように現状報告をし、メンバーにもその児童に対して普段よりも目を配り、情報を集めてもらうようにする。それと同時に担任は、個人記録表などを作成しさらなる現状把握に努める。そして、会議で指導方針・指導計画等を検討して指導にあたるようにする。随時、指導の成果を会議で報告するようにし、指導方針・計画等を吟味できるようにしていく。そして、指導した結果を良い点、悪い点を含めて全体に報告するようにする。そうすることによって①自分の指導を客観的に見て、振り返る機会を得る。②不登校の理解と指導法が全校的レベルで研究・検討されて、教師の自己研修の場になるなど有効に働く点が多いと考える。

おわりに

不登校の背景は様々あり、学校の取組みだけで不登校をなくすというのには無理がある。しかし、学校全体が意識して不登校の予防に取り組むことにより、不登校児童数の減少が期待できると思われる。不登校予防を考えた場合には、集団に入れない児童に対する言葉かけや遊びに誘うなどの学級の治療的な雰囲気づくりや児童の援助的関わり、また、それを生み出す教師の指導力、児童の人権を守る教師の態度などの必要性が改めて示された。これらの方向性をもとに、一人一人の児童に合わせて対応できるように考えていくことが今後の課題である。

謝辞

ご多忙のなか、調査にご協力いただきました小学校の先生方、児童のみなさんに心より感謝申し上げます。

文献

- 1) 文部省 (1992) 登校拒否 (不登校) 問題について—児童生徒の「心の居場所」作りを目指して— 学校不適応調査研究会議報告 文部省初等中等教育局
- 2) 岡山県教育センター (1993) 「登校拒否に関する研究」 岡山県教育センター紀要
- 3) 根本範子, 佐々木正昭 (1996) 「教育的雰囲気醸成する教師の行為についての研究」 兵庫教育大学生徒指導研究
- 4) 森田洋司 (1991) 『「不登校」現象の社会学』 学文者
- 5) 星野仁彦, 熊代永 (1986) 「登校拒否児の治療と教育」 日本文化科学社
- 6) 岩本利彦 (1993) 「登校拒否増加の社会的背景」 月刊学校教育相談第7巻 学事出版
- 7) 梅垣弘 (1988) 「クラス担任の登校拒否入門」 学事出版
- 8) 倉戸ヨシヤ (1993) 「確かな人間観に基づいた教師の指導性が望まれている」 『児童心理』 第47巻第8号 金子書房

(2000年3月31日受理)

資料

小学校上学年学級担任様

児童の不登校を予防する学級担任の指導援助のあり方についてのアンケートのお願い

現在、小中学校において不登校児童生徒の数は年々増加しています。文部省が設置した学校不適応対策調査研究協力者会議では1990年の中間報告で「登校拒否はどの子にも起こりうるものである」という見解を示し、学校での不登校問題への積極的な取り組みを呼びかけています。

このような中で、児童の不登校を予防する指導援助として何が必要であるかを検討するために、先生方が不登校予防という観点から児童に対してどのような指導援助を望ましいと思っているかについてお聞きしたく存じます。

お手数をおかけいたしますが、何卒ご協力をお願いいたします。

平成11年9月

福島大学教育学部 助教授 青木 真理
 福島大学大学院教育学研究科 渡部 学

I まず、先生方の性別、年齢、勤務先についてお聞きします。該当する番号に○をつけて下さい。

- 問1 あなたの性別 1. 男性 2. 女性
 問2 あなたの年齢 1. 20代 2. 30代 3. 40代 4. 50代
 問3 勤務先の地域 1. 県北 2. 県中 3. 県南 4. 会津 5. 南会津
 6. 相双 7. いわき

以下、不登校予防の指導援助意識及び対応についてお聞きします。

問4 不登校傾向の児童の指導をしたことがありますか。1. はい 2. いいえ

II これからの間については、自分の考えに一番近いものの番号に○をつけて下さい。

〈記入の仕方〉

次の項目は不登校予防という観点からみた児童に対する指導・援助としてどのくらい行うべきだと思いますか。それぞれについて、

5. した方がいい
 4. どちらかといえばした方がいい
 3. どちらともいえない
 2. どちらかといえばしない方がいい
 1. しない方がいい

のうち、もっとも当てはまると思うもの一つ選んで番号に○をつけて下さい。

※ 「どちらともいえない」には、はっきりと言えないときにだけ○をつけて下さい。

I 学級全体の子ども達に対して

- | | した方がいい | どちらかといえばした方がいい | どちらともいえない | しない方がいい | どちらかといえばしない方がいい |
|--|--------|----------------|-----------|---------|-----------------|
| 1. 先生の方からあいさつをする。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 2. 朝教室で子どもが来るのを待っている。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 3. ほめたり、はげましの意味で頭をなでる、肩をたたくなどする。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 4. 遊びや活動など一緒に取り組む。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 5. 子どもに対してやさしく、笑顔で接する。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ----- | | | | | |
| 6. 先生がグループに入って一緒に給食をとる。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 7. 休み時間に先生が遊びに誘う。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 8. 冗談を言ったりして笑わせる。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 9. 子どもに楽しい行事を企画する機会を与える。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 10. 休んだ人がいた場合、先生が心配してその人の様子をクラスの友達に聞いたりする。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ----- | | | | | |
| 11. 学級全体に対して、できるだけ学校を休まないように日頃から話しておく。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 12. 日記、気持ちなどを子どもにノートに書かせ、それに先生が感想などを書く。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 13. 子どもから話をしてきたとき、時間をかけてしっかり聞く。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 14. 先生の方から話す時間を作ってなやみごとなどの話を聞く。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 15. 授業中の個別指導の機会を多くする。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ----- | | | | | |
| 16. 授業中操作的活動や動きのある活動を多く取り入れる。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 17. 発表でまちがったことをいった子どもの意見を、うまくまとめてあげる。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 18. 学習の遅れがちな子どもに休み時間や放課後、学習の指導をする。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 19. 子どもがわからない問題があるときは、わかるまで丁寧に教える。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 20. 子どもが発表をしているとき一生懸命聞く。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ----- | | | | | |
| 21. 子どもの体調が悪いようなとき、やさしく声をかける。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 22. 子どもの良いところや頑張っているところを見つけて、励ましたり、ほめたりする。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |

裏のアンケートにもお願いします。

23. 始業時刻に遅れてきた子どもがいたら、本人を気遣った言葉かけをする。 5・4・3・2・1
24. 子どもが何か悪いことをした場合、すぐにおこらず理由をしっかり聞いてから対応を考える。 5・4・3・2・1
25. いじめがあった場合、話をしっかり聞いていじめた人を指導する。 5・4・3・2・1
-
26. ほかの先生に叱られたことがあったら、話を聞いてやさしくなぐさめる。 5・4・3・2・1
27. 失敗したことを笑ったり、馬鹿にしたりした子どもがいた場合注意する。 5・4・3・2・1

II 何となく元気がなく、おちこんでいる、不登校になりそうな子どもに対して

- | | | | | | |
|--|-------------|-------------|-------------|-------------|-----------------|
| | しない方が
いい | どちらか
とよい | どちらか
とよい | どちらか
とよい | しない
方が
いい |
| 1. 子どもの趣味や好きなことなどについて話を聞く。 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 |
| 2. 子どもの発表しやすい場面でだけ指名する。 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 |
| 3. 授業中はげましのことばをかける。 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 |
| 4. 宿題などを出す場合、あまりつらくならないよう気をつかう。 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 |
| 5. 学習発表会などで、活躍の場を与える。 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 |
| <hr/> | | | | | |
| 6. 係り活動などで負担にならない役割を与える。 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 |
| 7. あらかじめ本人の意思を確認してから席を決める。 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 |
| 8. 本人が好んでいる友達と席を近くにする。 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 |
| 9. 先生の席の近くにする。 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 |
| 10. 学級の元気のいい友だちといっしょの班や係りにする。 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 |
| <hr/> | | | | | |
| 11. 掃除の班など仲のいい友だちなどを考えて決める。 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 |
| 12. 仲のいい友達に遊びに誘うよう話しておく。 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 |
| 13. 一人でいて元気がないようなときは話しかけてあげるように仲の良い友達に頼んでおく。 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 |
| 14. 子どもが興味を持ちそうな明日のよていを帰りぎわにいう。 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 |
| 15. 子どもが元気がなかったりしたとき、保護者に連絡して話を聞く。 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 |

III 不登校傾向の子どもの理由で学校を休んだとき

- | | | | | | |
|---|-----------------|-------------|-------------|-------------|-----------------|
| | しない
方が
いい | どちらか
とよい | どちらか
とよい | どちらか
とよい | しない
方が
いい |
| 16. 学校に来ていないとき、学校に来るように電話ではげます。 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 |
| 17. 学校にきてないとき、子どもを迎えに行く。 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 |
| 18. 休んだ時のことを次の日、本人に詳しく聞く。 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 |
| 19. 休んだ日の次の日には温かい言葉かけをする。 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 |
| 20. 休んだとき、友達に電話をするようお願いする。 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 |
| <hr/> | | | | | |
| 21. 休んだとき、(次の日の朝)仲の良い友達に迎えに行かせる。 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 |
| 22. 休んだとき、学校の様子や次の日のよていを手紙で知らせる。 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 |
| 23. 休んだ次の日学校に行ったとき、「明日も元気に学校に来てね。」と励ましの言葉を言う。 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 |
| 24. 保健室など教室以外への登校を認める。 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 |
| 25. 遅れてもいいから学校に来るようにすすめる。 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 |
| <hr/> | | | | | |
| 26. 子どもが休んだとき、保護者に様子を聞きに家庭訪問する。 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 |
| 27. 子どもが休んだとき、家庭訪問して本人と話をする。 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 | 5・4・3・2・1 |

ここからは自由記述でお答えください。

1. した方がいいと思っても実行するのが難しいと思われるものもあると思います。それはどのような理由でですか。
2. 不登校を防ぐために心がけて実行していることは何ですか。
3. 不登校になりそうな子どもに対してできて良かったと思われる(こうすればよいと思われる)指導・援助は何ですか。

ご協力ありがとうございました。